様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１１５００

研究課題名（和文）武道における指導-学習過程の相互行為分析：実践的技能を伝え合う言語と身体の解明

研究課題名（英文）Multimodal Analysis of the Process for Instructing and Learning Practical Skills in Budo

研究代表者
名塩　征史（NASHIO, Seiji）

広島大学・森戸国際高等教育学院・准教授

研究者番号：００４６６４２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、空手、柔術、太道の稽古場面を対象に、身体的な技能の伝承を目的とした指導-学習プロセスを観察・分析し、次の点を明らかにした。１)指導者による身体的な模範演技と分析的な発話を組み合わせた指導行為は、学習者の身体的実践を誘導し促進するだけでなく、言語化が難しい感覚や経験に学習者が自らアプローチすることを助けている。２）こうした技能の感覚的・経験的な側面は、論理的な説明により理解するのではなく、体験を通して把握することが望ましい。３）武道の稽古には、反復的な模倣を通して、実践的技能を巡る身体的、感覚的、経験的要素を包括的に身につける、いわゆる「真似して盗む」ための仕組みが備わっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
コロナ禍の影響により、昨今の教育現場ではオンラインでの対応が盛んに試行されているが、本研究の成果は、近年の日本社会に、対面での指導が提供する直接経験による教育効果の重要性を再確認させるものとなるだろう。また、世俗的で曖昧な認識に留まっていた「真似して盗む」や「習うより慣れろ」といった通説、また身体的実践における「心構え」の大切さなどが、実際の指導-学習において有意に機能していることを示唆した。本研究から得られる知見は、武道の稽古に限らず、他の教育場面に新たな指導法・学習法の提案と開発を促し、後世に残すべき様々な実践的技能の伝承に貢献することが期待される。

研究成果の概要（英文）：This research demonstrated the following facts through a multimodal analysis of the training sessions in Karate, Ju-jitsu, and Taido; 1) the instructions which consist of verbal and bodily conducts not only guide the learners' practices appropriately but also prompt and support them to approach their ineffable feelings and experiences by themselves, 2) such sensory or empirical essences of practical skills should be grasped and acquired through practices directly, not understood via logical explanations, and 3) the training session in Budo has the organization for acquiring the bodily, sensory, and empirical essences of practical skills comprehensively by repetitive/recurrent practices based on imitations of experts'.

研究分野：認知科学

キーワード：間身体的アプローチ　指導-学習インタラクション　武道　マルチモーダル分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究が焦点を当てた空手、柔術、太道などの現代武道は、不撓不屈の精神に基づく心身の鍛錬を重視する教育的価値観を背景に、身体的技術の習得だけでなく、礼儀や協調性を重んじる精神の健やかさを育むことも目的の一つとされている。その指導–学習過程は直接的かつ経験的で、身体的相互行為を通して他者と共に学ぶ活動を主軸とする。こうした活動は学校教育の大半を占める形式化された知の学習とは多くの点で異なるが、日常生活を支える何気ない振る舞いの多くは、むしろ武道の稽古のように実践を通して身につくものである。

武道だけでなく、スポーツや職業的な専門技術に熟達するには、特殊な実践的知性を身につける必要がある。しかし、そうした知性は言語化や体系化が難しく、定まった指導法や教材の開発も難しい。こうした技術や知識の伝承と保存のためには、実践的な学びとそれに応じた指導のより良いあり方を模索しなければならない。本研究の開始当初の時点でもすでに、認知科学や人文社会科学分野において同種の指導–学習場面を詳細に分析・記述する様々な試みがなされていた。

本研究の代表者・分担者も、当初からすでに武道の稽古における指導者と学習者との身体的相互行為による指導–学習場面に焦点を当て、身体的技法の伝承の一端を具体的な事例の分析を通して記述していたが、教え学ぶ身体的相互行為を取り巻く周囲の環境や身体配置の変容など、その学びの場にかかる複雑な体系や多様性の解明には至っていなかった。

２．研究の目的

本研究における核心的な問いは、以下の二つであった。

(1) 武道での技術の向上を目指した指導-学習の相互行為が協調的に達成されるためには、どのような言語的、身体的、状況的資源がどのように利用されているのか
(2) 実践教育における新たな可能性を模索するために、(1)で明らかとなる武道の指導–学習過程の実態とその対象となる技能をどのように記述し直し、どのような形で提供すれば、より多くの指導者・学習者に広く有益な教育的資源となるか

上記の問いを指針とし、本研究では、他者と対峙し働きかけることを前提とするインタラクティブな身体技法である武道を対象とし、(1)その技法の実践的指導-学習過程を解明し、(2)今後の実践教育にかかる新たな可能性を模索する上で有効な知見を提供することを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、まず調査対象となる武道場（空手［静岡県・広島県］、柔術［千葉県］、太道［兵庫県］）の稽古場面のビデオデータを収録し、そのデータの詳細な研究資料を作成した。この研究資料は、微視的相互行為分析によって、各武道における身体技法の指導–学習過程を明示化し

たものである。

本研究の相互行為論的プローチでは、指導者と学習者の間で交わされる言語的および非言語的行為の応酬を、従来の会話分析やジェスチャー研究などで開発されてきた転記法によって詳細に転記した。この転記をもとに、その時その場に状況づけられた各行為主体の一挙手一踏足がどのように関連し合い、一連の相互行為が組織化されていくのか、その秒単位の微細な変化をつぶさに分析・記述する微視的相互行為分析を行った。この手法は、時には無意識に繰り出される何気ない言動が当該の指導-学習過程にもたらす微細な変化も捉えられるため、言語化が困難と思われる武道の実践的技能を複数の観察可能な振る舞いによって共有しようとする主体間の試みの実態を解明するには最適である。

この転記により、各参与者の身体動作や発話が時間軸に沿って併記され、その共起関係や時空間的な隣接関係を一望のうちに確認することができるようになった。また、誰にでもわかる簡明な自然言語で「〇〇する」「〇〇になる」など、参与者の行為やその場の変化がありのままに記述され、各局面の映像や音声がいつでも参照できるように整理された。そのため、学術的な知へと収斂される前のありのままの発話–行為–状況の関係性を繰り返し参照し再考することが可能となった。

４．研究成果

令和 3 年度では、研究代表者、分担者がそれぞれ担当する武道データに基づくインタラティブな身体技法の実践的指導-学習過程の解明に取り組み、データ間の 共通点や相違点をいくつか明らかにすることができた。共通点としては、特に基本的な動作の繰り返しが多用されていること、また繰り返しの対象としていくつかの身体動作が有意に組み合わされ、ひとまとまりの「形/型」として機能していることが挙げられる。一方、相違点としては、「形/型」がどの程度明確に規定されているか、またそれに応じて一定の動作の繰り返しがどの程度積極的に実施されているかに、データ間で差があることが挙げられる。このデータ間の差には、各データにおける参与者の年齢(成人向けか年少者向けか)、稽古の達成志向、各武道の形式性等の影響が見受けられた。

当時のコロナ禍の影響により、予定されていた新規データの収集が困難となったが、月一回のペースで研究ミーティングを開催し、既存データの再分析に基づく議論を行い、武道の歴史的背景の確認や「形/型」に関する理論やその一般化に向けた検討に着手することができた。令和 3 年度の成果報告は、国内外の学会・研究会での研究発表を通して行われ、その都度、他の研究者や武道実践者から有益な情報や助言を得ることができた。特に国際語用論学会（Conference of International Pragmatics）におけるパネルセッションでは、武道だけでなく、研究代表者による三味線を対象とする研究の中で空手との共通点が指摘されるなど、他の芸道を対象とする研究とも共同することで、本研究の視野を広げる貴重な機会となった。

令和 4 年度では、武道の稽古の要とも言える「型」に引き続き注目し、その実践的教範とも言える「型」の指導-学習法としての実態と、それを身につける上で特に重要と思われる「模倣」

と「反復」といった練習法に焦点を当てた分析を行った。これまでの相互行為論的アプローチを優先するスタイルから、身体教育学や武道論などの分野における先行研究の成果にも重きを置き、データを用いた実証的な分析と記述を理論的に裏付ける作業にも力を入れた。その結果、従来の関連研究においては、「型」が熟練者の視点から分析され、その身体技術の向上に理想的な性質が説得的に記述されているが、本事業における指導-学習場面の相互行為分析が示唆するものは、そうした「型」が未だ活性化されていない「学びの途中」における指導者、学習者の試行錯誤の様相であるということが明らかになった。この違いにこそ、本研究の試みの意義を改めて確認できたことが令和 4 年度の大きな成果の一つと言える。

また、令和 5 年 7 月に開催予定の国際語用論学会に向けて、「型」、「模倣」、「反復」をキーワードとしたパネルセッションを企画し、本研究の研究代表者と分担者による武道研究のみならず、茶道、漫才、陶芸といった他の芸道データを用いた研究の成果も取り入れ、発表者間での情報共有をおこなった。他にもデータ間での比較対照による研究成果として、研究代表者が持つ理容室データと空手データとの対照研究から、どのような目的で活動が行われているか、また活動の遂行に発話が必要かどうかなどが、活動中の参与者の振る舞いの質に大きく影響していることを改めて確認した。こうした試みを通して、武道／芸道の稽古場面の特殊性がより鮮明になり、その形式性や制度性、指導者-学習者間の非対称な関係を、当該の指導-学習プロセスを記述する上で極めて重要な要素として捉え直すことができた。

令和 5 年度では、「型」に志向する指導-学習インタラクションがどのような要素に支えられ、促進されるのかに焦点を当てた分析と考察を行った。主な要素としては、模倣やシミュレーションといった練習法、技/形の分節化や分析的記述といった指導法、稽古活動の体系化や定式化などが指摘され、その中から研究者/分担者それぞれの関心に即していくつかを焦点化し、担当するデータを用いた分析が進められた。その成果は、令和 5 年 7 月にベルギーで開催された国際語用論学会研究大会に採択されたパネルセッションで報告された。同セッションでは、他の芸道研究者からの意見も取り入れた多角的な議論も実現した。また令和 6 年 2 月には、国立国語研究所にて本研究事業が主催するシンポジウム「「わざ」を伝えるマルチモダリティ： 武道・芸道における指導-学習インタラ クション」を開催した。ここでは本事業の研究期間全体を通して得られた成果を報告するとともに、これまでにすでに一定の成果を上げている「わざ言語」に関する一連の研究との整合性を確認し、今後の課題と発展の方向性を示した。本シンポジウムでは、これまでの武道研究においては、各技やその習得法の捉え方が指導者や熟練者の視点から記述されていることが指摘され、そのため習得の途上にある学習者の練習場面(稽古)の中に見られる「未熟な」技の実践(模倣や反復)は、当該武道の特徴として熟練者が実践する/語る技とは、多くの点で異なることが示唆された。その事実を踏まえた上で、改めて稽古中の指導者/学習者 の言語と身体に注目し、技の伝承、すなわち、学習者の身体を熟練者の身体へと近づける手続きが、具体的にはどのように行われているのかについて分析・考察した成果を報告した。本シンポジウムには、本科研の構成員以外の研究者も発表者に迎え、多様な聴衆との間で充実した議論を行うことができた。

本研究開始当初の予定では、新たなデータの収集も目的の一つであったが、先述の通り、コロナ禍の影響でフィールドワークが困難となってしまった。そのため、既存のデータから抽出された知見を、事業期間中に新たなデータによって裏付けるような検証作業を行うことができなかった。これが本研究の進展を大きく遅らせる結果となり、実際の教育現場に提供できるような知見の整理には至らなかった。しかし、本研究の締めくくりとして開催された上述のシンポジウムの影響で、各所からデータ提供の申し出があり、実際に本事業終了間際に新たなデータ収集を行うことができた。引き続き多様なデータの収集を行い、広く他の身体教育や伝統芸能の分野へと応用する可能性を見出すことが、今後に残された課題の一つと言えるだろう。

今後の新たな展開につながる成果の一つとしては、武道における指導を、学習者に知識や技術を直に授ける行為としてではなく、学習者自身の探索的な学びを支え促進する行為として捉え直したことが挙げられる。特に、特殊な技能の実践に伴う動感（実践者の感覚や知覚）は、言葉では言い表し難いにもかかわらず、その技能の習得に不可欠な要素であり、そのため学習者は究極的にはその動感を自己の身体を持って自ら探し当てなければならない。本事業が分析してきた言語的／非言語的指導行為には、そうした学習者自身の目に見えない探索を支え促進する側面も見受けられた。この点は、これまでに身体教育学、スポーツ運動学、「わざ言語」の研究などでも度々指摘されてきたところであり、本研究の成果を武道／芸道以外の様々な活動場面へと応用していく上で重要な基点となることが期待される。今後はこの成果をもとに、より多くの教育活動に還元可能な汎用性の高い知見を目指して、後継研究事業の立案に着手する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 名塩征史	４．巻 5
２．論文標題 活動を遂行する発話／活動と並行する発話	５．発行年 2023年
３．雑誌名 広島大学森戸国際高等教育学院紀要	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伝康晴	４．巻 3
２．論文標題 身体的実演を伴う教授場面の相互行為分析－アドレス性に注目して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 動的語用論の構築へ向けて（田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝編）	６．最初と最後の頁 140-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 Seiji Nashio
２．発表標題 Multimodal Analysis of Kata-based Training in a Child-oriented Karate Lesson: How to Achieve an Adequate Imitation of an Expert’s Practice
３．学会等名 18th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yasuharu Den
２．発表標題 Imitation and simulation in Jiu-jitsu practice: Participants’ orientation toward the organization of the class
３．学会等名 18th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Ikuyo Morimoto
２．発表標題 Instructing and Learning Kata in Unison: A Multimodal Analysis of a Taido Lesson
３．学会等名 18th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 「教える」話しぶり／「学ぶ」話しぶり：自他の認識を反映した話し方によって演出される稽古もしくは師弟
３．学会等名 日本認知言語学会第24回全国大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 コミュニケーション活動のタイプ
３．学会等名 社会言語科学会講習会 2023 秋：社会言語科学の方法としての「比較」
４．発表年 2023年

１．発表者名 伝康晴・居關友里子
２．発表標題 アドレス行動の多様性の実証的分析
３．学会等名 日本語用論学会第26回大会ワークショップ「会話における発話のアドレス性」
４．発表年 2023年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 身体的な学びを支える分析的指導：空手の指導におけるマルチモーダルな「わざ」の記述
３．学会等名 シンポジウム「わざ」を伝えるマルチモダリティ：武道・芸道における指導-学習インタラクション
４．発表年 2024年

１．発表者名 伝康晴
２．発表標題 「模倣」と「模擬」：柔術練習における指導者の志向
３．学会等名 シンポジウム「わざ」を伝えるマルチモダリティ：武道・芸道における指導-学習インタラクション
４．発表年 2024年

１．発表者名 森本郁代
２．発表標題 武道の稽古における「模倣」：型の一斉練習における同期の組織化
３．学会等名 シンポジウム「わざ」を伝えるマルチモダリティ：武道・芸道における指導-学習インタラクション
４．発表年 2024年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 技を伝承する「真似」と「反復」：空手と三味線の稽古場面の対照から
３．学会等名 コミュニケーションの自然誌
４．発表年 2022年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 空手の稽古における「型」を用いた学びの仕組み－動きの反復と端的な発語－
３．学会等名 社会言語科学会第47回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 伝康晴
２．発表標題 AIからフィールド、偶然と必然、恩師、反抗心
３．学会等名 日本認知科学会第39会大会オーガナイズドセッション「「生きる」と向き合う私の「生き様」を語る」
４．発表年 2022年

１．発表者名 伝康晴
２．発表標題 文化の伝承を支える他者との向き合い方
３．学会等名 第14回共創学研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 教えるための参加・学ぶための参加 ： 年少者向け空手教室における指導 ―学習過程の分析
３．学会等名 ことば・認知・インタラクション10
４．発表年 2022年

１．発表者名 森本郁代
２．発表標題 武道における身体化された指導：「相手の身体に触れる」ふるまいの分析から
３．学会等名 日常会話コーパスVII
４．発表年 2022年

１．発表者名 名塩征史
２．発表標題 空手の形（かた）の稽古に用いられる「号令」：実在しない相手との「間合い」
３．学会等名 日本認知科学会「間合い」研究分科会第19回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ikuyo Morimoto
２．発表標題 The multimodal ritual practices used for organizing transitions between activities in a Budo class: an analysis of a Taido lesson
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yasuharu Den
２．発表標題 Instruction by installment: A recurrent format used in teaching Jiu-jitsu techniques
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Seiji Nashio
２．発表標題 The application of standard melody patterns to instruction in Shamisen lessons: Findings from multimodal analysis of Shamisen practice through simultaneous imitation
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森本　郁代 (MORIMOTO Ikuyo) (40434881)	関西学院大学・法学部・教授 (34504)	
研究分担者	傳　康晴 (DEN Yasuharu) (70291458)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授 (12501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関